

古英語の音変化に関する一考察（1） A study of Old English sound change (1)

森 基雄
Motoo MORI

要旨

本稿の目的は古英語における数ある音変化の主なものを取り上げ、そのプロセスと生起順序について論じることである。本稿を進めていくに当たってまず拠り所として注目したいのが、ゲルマン語派の中の古英語を明確に特徴づける強勢母音に起こった音変化とその生起順序に関する Campbell (1959: 50-109) による詳細な論考である。

Campbell (1959: 109) は強勢母音における数ある音変化についての論考の最後の箇所、その主なものの生起順序を次のように示している：1. アングロ・フリジア語 (Anglo-Frisian) の鼻音の a、ā の発達と WGmc ā から æ/ē への発達；2. WGmc ai > ā；3. WGmc a の æ への前舌化；4. 割れ (breaking) とそれに関連する後退 (retraction) の過程；5. 後母音の前での a、ā の復元 (restoration)；6. 第2の前舌化 (主にマーシア方言の Vespasian Psalter)。前母音の硬口蓋二重母音化 (palatal diphthongization) と後母音の早期の硬口蓋二重母音化 (主にウェストサクソン方言とノーサンブリア方言において)；7. i-ウムラウト (i-mutation)；8. 後舌ウムラウト (back mutation)；9. 滑化 (smoothing)；10. 母音縮約 (contraction of vowels)、代償的長音化 (compensatory lengthening)。

今回 (1) では上記の音変化の具体例とそのプロセスの詳細について論じ、次回 (2・完) ではさらにこれらの音変化の生起順序について論じることにする。

キーワード：アングロ・フリジア明音化、割れ、硬口蓋二重母音化、i-ウムラウト、滑化

1. アングロ・フリジア語の鼻音の a、ā の発達と WGmc ā から æ/ē への発達

これは鼻音の前にあった WGmc a、ā の ā、ǣ への鼻音化と鼻音の前以外での WGmc ā の WS æ、Angl ē への前舌化を指す。アングロ・フリジア語とは西ゲルマン諸語の中でも特に相互の類似点の多い古英語と古フリジア語を1つの言語群としてとらえた名称であり、この1. と後記で取り上げる3. に関する類似点は特に顕著である。すなわち WGmc a はこの両言語において鼻音の前で鼻音化され、のちにさらに o に円唇化されることもあった：OE mann、monn、OFris mon 'man' (OS mann、OHG man)；OE band、bond、OFris band '(s)he tied' (OS band、OHG bant)；OE nama、noma、OFris noma 'name' (OS、OHG namo)。また鼻音化された長音の ā は両言語において徹底して ö に円唇化された。ǣ は鼻音の前の (IE ē > Gmc æ >) WGmc ā に由来するものと、Gmc a + 鼻音 + 無声摩擦音から ā + 無声摩擦音への音変化に由来するものから成る：OE、OFris mōna 'moon' (OS、OHG māno、Go mēna)；OE、OFris nōmon 'they took' (OS、OHG nāmun、Go nēmun)；Gmc *branht- >

*brāht->OE, OFris brōhte '(s)he brought' (OS, OHG, Go brāhta) ; OE gōs, OFris *gōs (ModWFrīs goes), MLG gōs 'goose' (OHG gans) ; OE oþer, OFris oþer 'other' (OS āðar, oðar, andar, OHG andar, Go anþar) ; OE sōft, sēfte 'soft, gentle', OFris sēft(e) 'soft(ly)' (OS sāftor 'more soft', OHG samft, semfti 'easy')。なお OE sēfte, OFris sēft(e) の ē はさらに i-ウムラウトが加わった結果である。

そして鼻音の前以外でのWGmc ā は古英語ではWS æ, Angl ē, 古フリジア語では ē となった : OE dæd, dēd, OFris dēd(e) 'deed' (OS dād, OHG tāt, Go gadēps)。

2. WGmc ai > ā

WGmc ai は古英語では ā となった : OE þā 'those' (主格対格複数) (OS thē, Go þái) ; OE aþ 'oath' (OS ēd, OHG eid, Go áiþs) ; OE stān 'stone' (OS stēn, OHG stein, Go stáins)。

3. WGmc a の æ への前舌化 (Anglo-Frisian Brightening)

WGmc a は鼻音の前以外では前舌化された。そして同様の変化は古フリジア語にも見られることから、これはアングロ・フリジア明音化 (Anglo-Frisian Brightening、以下AFBと略す) と呼ばれる。これはまた Campbell が⁶として挙げている、そして本稿でも後記 6. で取り上げる古英語のマーシア方言で起こった後期の前舌化 (これは第2の前舌化 (second fronting) と呼ばれる) に対し、第1の前舌化 (first fronting) と呼ばれる : OE fæder, OFris feder 'father' (OS fader, OHG fater)。

4. 割れ (breaking) とそれに関連する後退 (retraction) の過程

割れ (breaking) により、前母音 æ, ǣ, e, ē, i, ī が特定の子音または子音群の前でそれぞれ ea, ēa, eo, ēo, io, īo に二重母音化され、のちに io, īo はウェストサクソン方言では eo, ēo に、またアングリア方言では滑化の環境にあった場合を除き eo, ēo になった。

次にこの割れの事例を æ > ea, ǣ > ēa, e > eo, ē > ēo, i > io, ī > īo の順に示す。

・ AFBによる æ の h の前での割れ。非常に規則的 : seah '(s)he saw' (OS, OHG sah) ; eahta 'eight' (OS, OHG ahta) ; meahht 'power' (OS, OHG maht)。

・ AFBによる æ の IC の前での割れ。これはウェストサクソン方言とケント方言でのみ見られる : WGmc *ald > *æld > eald 'old' (OS ald, OHG alt) ; ealle 'all' (OS, OHG alle) ; WGmc *fallan > *fællan > feallan 'to fall' (OS, OHG fallan) ; WGmc *haldan > *hældan > healdan 'to hold' (OS haldan, OHG haltan) ; healm 'straw' (OHG halm) ; swealwe 'swallow' (OHG swalewa)。

なお、IC の C が半母音の軟口蓋音 [w] であった場合には swealwe のように一種の後舌化とも言える割れが起こったのに対し、例えば WGmc *talljan > (AFB) OE *tælljan > (i-ウムラウト) tellan 'to tell' (OS tellian, ON telja) のように IC が半母音の硬口蓋音 [j] による西ゲルマン語の子音重複 (gemination) に由来する ll であった場合には割れは起こらなかった。もし割れが起こっていたら、さらに i-ウムラウトを経て OE **tiellan となっていたはずである。

・ AFBによる æ の rC の前での割れ。ノーサンブリア方言以外の方言ではきわめて規則的 : wearm 'warm' (OS, OHG warm) ; spearwa 'sparrow' (OHG sparo, Go sparwa) ; bearn 'child' (OS, OHG barn) ; mearc 'boundary, border' (OS, OHG marka) ; mearg 'marrow' (OS, OHG marg) ; wearg 'criminal' (OHG warg) ; fearh 'piglet'

(OHG farah)。

また IC の場合と同じく rC の C が *spearwa* のように半母音の軟口蓋音 [w] であった場合には割れが起こったのに対し、C が同じく半母音でありながら硬口蓋音 [j] であった場合、例えば WS *erian* ‘to plow’ (Go *arjan*)、*herges* ‘army’ (属格単数) (OS, OHG *heries*, Go *harjis*) が示すとおり割れは起こっていない、すなわち (割れ) ***earjan*、***hearjæs* > (i-ウムラウト) WS ***ierian*、***hieries* とはなっていない。

・ (WGmc *ā*) WS *æ* の h の前での割れ : *nēah* ‘near’ (Angl *nēh*, OS, OHG *nāh*)。

・ (WGmc *e*) e の h, lh, lw, rC の前での割れ : *seoh* ‘see!’ (OS, OHG *seh*) ; *feohtan* ‘to fight’ (OS, OHG *fehntan*) ; WGmc **selh* > OE *seolh* ‘seal’ (OHG *selah*) ; WGmc **melwas* > **melwæs* > *meolwes* ‘meal’ (属格単数)。

なお主格単数は Gmc **melwan* > *melu*, *meolu* (OS, OHG *melo*) であるが、*meolu* の eo は次音節の u による後舌ウムラウトに起因するものか、あるいは割れを規則的に引き起こす **melw-* + 接辞母音という形態を維持した斜格形の影響によるものなのかは判定がむずかしい ; *beorg* ‘hill, mountain’ (OS, OHG *berg*) ; *weorpan* ‘to throw’ (OS *werpan*) ; *weorþan* ‘to become’ (OS *werðan*) ; *weorc* ‘work’ (OS, OHG *werk*) ; *beorht* ‘bright’ (OS *berht*)。

・ w の前でも同様の (WGmc *e*) e の二重母音化が起こった : *cneowes* ‘knee’ (属格単数) (OS, OHG *knewes*)。なお、この二重母音化は *æ* の i-ウムラウトに由来する e にも起こった : *ewe*, *eowe* ‘ewe’ (L *ovis* ‘sheep’, Go *awistr* ‘sheepfold’)。

・ (WGmc *ā*) Angl *ē* の h の前での割れ : **nēhwisti* (WS **næhwisti*) > **nēohwist* (WS **næhwisti*) > Merc *nēowist* (WS *nēawist*) ‘neighborhood’ (OHG *nāhwist*) ; Angl **nēhlæcan* (WS **næhlæcan*) > Angl **nēohlæcan* (WS **næhlæcan*) > Merc *nēolæcan* (WS *nēalæcan*) ‘to approach’。

しかし Angl *ē* の割れは *nēh* ‘near’ (WS *nēah*) には見られない。この場合アングリヤ方言でも割れによりいったんは **nēoh* となったが、後記で取り上げる h の前での滑化 (smoothing) による単母音化の結果、割れを受ける前の *nēh* に逆戻りしたと考えられる。すなわち *nēh* がかつては **nēoh* であったことは上記の *nēowist* と *nēolæcan* からも明らかであり、h はこのように母音と共鳴音 (ここでは w, l) に挟まれていた場合には滑化に先立って消失したと考えられる。また *nēh* の最上級 **nēhist* > *nēhst*, *nēst* ‘nearest’ には *ē* の割れは見られないが、i が後続していた h の前では割れは起こらなかったのか、あるいはいったん割れは起こったものの滑化により逆戻りしたのかは証明がむずかしい。なお、*nēst* は **nēhist* > **nēist* > (母音縮約) *nēst* という音過程の結果である。

・ i の h の前での割れ : **mihs* > **miohs* > WS *miox* > *meox* ‘dung’ ; **sihiþ* > **siohiþ* > Kt *-siohð* ‘(s)he sees’ (OS, OHG (gi) *sihit*)。ウェストサクソン方言では io はさらに i-ウムラウトを経て *siehp* となったが、アングリヤ方言では io の h の前での滑化による i への単母音化と接辞母音 i の消失を反映する Nbr *gesihþ*、滑化に加え母音間の h の消失とそれに伴う母音縮約 (**ihi* > *i*) を反映する Merc *gesip* が見られる。

・ i の lh の前での割れ : WS **sčielan* > *bestcylan* ‘to squint’。これは **skilhjan* (OHG *skilihen*) が割れにより **skiolhjan*、**sk* の硬口蓋化により **sčiolhjan*、i-ウムラウトにより **sčielhjan*、j の消失により **sčielhan*、h の消失とそれに伴う代償的長音化により **sčielan*、そしてウェストサクソン方言特有の *ie* > *ȳ* という音変化により *-scȳlan* となった結果である。しかしさらなる該当例と言える WGmc **felhan* (OS *bifelhan*) ‘to push in’ の直説法現在 3 人称単数 **filhiþ* > Merc *ætfileð* ‘(s)he clings’ には割れは確認できない。これは **filhiþ* が h の消失と接辞母音 i の弱化を経たものであるが、**filhiþ* は **filhiþ* > (割れ) **fiolhiþ* > (滑化) **filhiþ* に逆戻りという音過程の結果なのか (Hogg 1992 : 89)、あるいは接辞母音 i が後続する lh の前ではそもそも割れが起こらなかった結果なのか (Ringe & Taylor 2014 : 307) は断定できない。他方、これに対応する WS *filhp* は **filhiþ* > (割れ) **fiolhiþ* > (i-ウムラウト)

*fielhiþ、そしてそこへウエストサクソン方言特有の ie> i という音変化が加わった結果であったと考えられる。

・ i の rC の前での割れ : *hirdi>*hiordi>Nbr hiorde、Merc heorde 'herdsman' (OS hirdi、OHG hirti) ; *[*girnjan]>*giornjan>Nbr giorno 'to be eager for, to desire' (OS girnian)。ウエストサクソン方言では io はさらに i-ウムラウトを経てそれぞれ hierde、giernan となった。

アングリア方言ではまた rh、rk、rg、rw + *j- の前では i の io への割れは見られず、ウエストサクソン方言では io への割れとさらにその ie への i-ウムラウトが起こった : Merc gebirhtan 'to reveal' (WS *gebiorhtjan>gebierhtan、Go gabairhtjan) ; *swirhjan->Nbr swira 'neck' (*swirhjan->WS *swiorhja>*swierhja>*swiera>swýra) ; Gmc *berkjön>Merc birce 'birch' (OHG birka) ; *gebirgjan>Nbr gebirga 'to taste' ; *smirwjan>Merc smirwan、North smiriga 'to smear, to anoint' (WS *smiorwjan>smierwan、OHG smirwen)。そしてさらに後続の rC + *j- の C が h、k、g、w 以外の場合でも i の割れを示さないケースがある : *firrjan>Merc afirran、Nbr afirra 'to remove' (WS *āfirrjan>āfierran、OHG firren) ; *hirtjan>Merc hirtan 'to encourage' (WS *hiortjan>hiertan 'to encourage'、OHG gihirzen 'to agree')。

・ w の前でも同様の i の二重母音化が起こった : *siwæn>*āsiowen>āseowen ~ āsiwen 'filtered' (OHG siwan)。ただし次音節に i が後続していた場合には二重母音化は見られない : *siwid>*gesiwed 'sewn' (Go siujan 'to sew')。

・ i の h の前での割れ : *liht>WS liht>lēoht 'light in weight' (OHG liht)。他方、アングリア方言では io は滑化により ī となった : Angl *liht>Merc、Nbr liht。

また割れと同様の環境で、しかも割れと同時期のものとされる後退 (retraction) により、æ、e、i が方言によっては二重母音ではなく、同じ舌位の後母音 a、o、u となった。しかも e、i の後退はそれらが w と r の間にあった場合に見られる。

・ AFB による æ の a への後退 : Angl ald 'old' (WS、Kt eald) ; Angl alle 'all' (WS、Kt ealle) ; Merc fallan、Nbr falla 'to fall' (WS feallan) ; Merc haldan、Nbr halda 'to hold' (WS、Kt healdan) ; Angl halm 'straw' (WS healm) ; Angl swalwe 'swallow' (WS swealwe)。そして æ の場合、ノーサンブリア方言では rC の前でも割れによる ea と並んで a への後退を示す例がある。しかしこの場合、唇音が母音前位置を占めることが多い : warþ、wearþ '(s)he became' ; warp、wearp '(s)he threw' ; arm、earm 'arm' ; arm、earm 'poor' ; darr、dearr '(s)he dares' ; farr、fearr 'bull'。またマーシア方言には h の前での後退を示すきわめて稀な例がある : maht、meaht 'power'。AFB による æ はさらに w+後母音または非高舌母音が後続した場合には a に後退した : Gmc *awalaz>WGmc *awal>*æwæl>awel 'hook, fork' (ON sóð-áll 'meat-fork') ; *þawōjan>þawian 'to thaw'。ただし Gmc *wi の前では æ の後退は起こらず、æ は i-ウムラウトにより e となり、のちにさらにこの e は後続の w の影響により eo に二重母音化された : ewe、eowe 'ewe' (L ovis 'sheep'、Go awistr 'sheepfold')。

・ e の o への後退 : *werpan>Nbr worpa 'to throw' (WS weorpan) ; *werþan>Nbr worða 'to become' (WS weorþan)。他方、Nbr werc 'work' (WS weorc) では e の後退は見られない。しかもこれはウエストサクソン方言と同様いったんは割れにより *weorc となったものの、のちにアングリア方言特有の現象である滑化による単母音化を受けた結果である。

・ i の u への後退 : *wirsi (OS、OHG wirs)>nWS *wursi>Angl wyrse 'worse'。語根母音 y は後退の結果音 u がさらに i-ウムラウトを経た結果である。これに対しウエストサクソン方言では *wirsi は割れにより*wiorsi、さらに i-ウムラウトを経て wiers となった。

・ (WGmc ā>) POE æ は w の前で ā に後退した : WGmc *blāan>POE *blæwan>WS blāwan、Nbr blāwa 'to

blow' (OHG blāen) ; WGmc *sāan > POE *sāwan > WS sāwan, Nbr sāwa 'to sow' (OS sājan, OHG sāhen, sāwen)。ただし i, j が後続していた w の前では æ の後退は見られない : WS *æltæwi > æltæwe 'complete, perfect' (Go taihuntēweis 'decimal') ; POE *læwjan > WS lāwan, Nbr belēwa 'to betray' (OHG gilāen, Go lēwjan)。

æ, e, i の割れは後続する特定の子音または子音群の影響でその後位置にきわめて短い、音量としてはほぼ無きに等しいようなわたり音を発生させたことに始まる [æu]、[eu]、[iu] への二重母音化であったと考えられるのであり、のちにこの3者は ea, eo, io となった。Lass (1994: 51) によれば、二重母音高さ調和 (Diphthong Height Harmony) により [æu] は ea [æa]、そして [eu] は eo [eo] となったが (Colman (1985: 9)、Hogg (1992: 87)、Lass (1994: 67) は ea の音価を [æa] と表記しているが、本稿では [æa] と表記する)、io の音価は Colman (1985: 8)、Lass (1994: 67) の主張どおり、二重母音高さ調和の観点から [iu] のままであったと考えられる。同様のことは長母音 æ, ē, ī の割れによる ēa, ēo, īo についても言える。すなわち æ, ē, ī は割れによりまず [æu]、[ēu]、[īu] となり、さらに [æu]、[ēu] は二重母音高さ調和によりそれぞれ ēa [æa]、ēo [ēo] となり、[iu] は二重母音高さ調和の観点から表記は io でも音価は [iu] のままであったと考えられる。そして ēa, ēo はそれぞれ WGmc au, eu の反映 ēa, ēo と併合し、īo は Gmc eu の早期の i-ウムラウトによる iu の反映 īo と併合した (Gmc *beuð- > *biudip > Kt bebiot '(s)he commands')。

5. 後母音の前での a, ā の復元 (restoration)

AFBによる æ と (WGmc ā >) POE æ は次音節の後母音の影響でその前舌化を失い、a, ā となった。これは元の a, ā への逆戻りとも言えることから復元 (restoration) と呼ばれる。ā への復元はウェストサクソン方言に見られるが、a への復元ほど規則的ではなかった : fæt 'container'、(主格対格複数) fatu ; WS mæg 'kinsman'、(主格対格複数) māgas (OS māg, māgos)。しかし他の方言では ā への復元は見られず、māgas に対応する他の方言形は WGmc ā の最も普通の発達を示す mēgas である。

6. 第2の前舌化 (second fronting) と硬口蓋二重母音化 (palatal diphthongization)

マーシア方言に起こった第2の前舌化により、AFBによる æ は復元と後退の環境にはなかった場合には e への上げを受け、さらに AFB による æ が復元を受けた結果音 a は再び æ に前舌化された : feder 'father' (WS fæder) ; fet 'container' (WS fæt) ; (主格対格複数) *fætu 'containers' > (後舌ウムラウト) featu (WS fatu)。そして第2の前舌化は復元と後退の環境、すなわち l + 後母音、IC の前では起こらなかった : hwalas 'whales' ; galan 'to sing' ; ald 'old'。Hogg (1992: 139) はこの場合、第2の前舌化が起こらなかったのはこの環境にあった l が軟口蓋音であったためであるとしている。そして Hogg はこの l の音価を [ɫ] と表記している。また AFB の場合と同じく第2の前舌化は鼻音化された a には起こらなかった : land 'land' ; nama 'name'。

そして硬口蓋二重母音化についてであるが (本稿ではその主なケースである前母音の実例のみを取り上げることとする)、これはウェストサクソン方言において規則的に起こった変化であり、語頭の [k]、[g]、[sk] が i-ウムラウトの生起に先立ち後続の前母音 æ, æ, e, ē の影響で硬口蓋化され、次にこれらの前母音が先行のこれらの硬口蓋化された子音 ç, ġ, sc の影響で ea, ēa, ie, iē に二重母音化された。またこの硬口蓋二重母音化は Gmc [j] に由来する ġ の後位置でも起こった。

・ AFB による æ > ea : WGmc *katil > *kætil > *cætil > WS *ceatil > (さらに i-ウムラウトを経て) *cietel > cýtel 'kettle'

(Angl *četel*, OHG *kezziil*, Go *katilē*) ; *ġeaf* '(s)he gave' (Nbr *āġæf*, OS *gaf*) ; WS *sceaft* 'shaft' (OS, OHG *skaft*)。

・WGmc *ā* > WS *æ* > *ēa* : L *cāseus* > WGmc **kāsī* > WS **cæsi* > **cēasi* > (さらに i-ウムラウトを経て) **cīese* > *cýse* 'cheese' (Angl, Kt *čēse*, OS, OHG *kāsi*) ; WS **ġæfun* > *ġeafon* 'they gave' (Nbr *āġefon*, OS *ġabun*) ; WGmc **jār* > WS **ġær* > *ġear* 'year' (Angl, Kt *ġēr*, OS, OHG *jār*) ; WS **scāp* > *scēap* 'sheep' (Merc, Kt *scēp*, OS *skāp*)。

・WGmc *e* > *ie* : *ġieldan* 'to pay (for)' (Merc *ġeldan*, Nbr *ġelda*, OS *geldan*) ; *ġiefan* 'to give' (OS *geban*) ; *scieran* 'to cut, to shear' (OHG *skeran*)。

・WGmc *ē* > *īe* : WGmc **jēta* > WS *ġieta*, *ġiet* 'still, yet' (Merc, Nbr *ġēt*, OFris *jēt*)。

Campbell は第2の前舌化と硬口蓋二重母音化を確たる根拠もなくあたかも同時期のものであったかのようにとちらもともに6.として挙げているが、このことはまた古英語における音変化の中でこの2つの音変化の相互の順序付けができていないことを示しているとも言えるであろう。

以上の前母音の硬口蓋二重母音化は i-ウムラウトに先立って起こったと考えられるが、硬口蓋二重母音化は後母音にも、そしてさらに *sc* の後位置の後母音の i-ウムラウトの結果音にも起こっているケースもごく一部ではあるが見られる (Campbell 1959: 68-69)。

7. i-ウムラウト (i-mutation)

次音節の i, j の影響による先行母音の前舌化と上げが起こった。これは i-ウムラウトと呼ばれる音変化であり、ゴート語以外のすべてのゲルマン諸語に見られるが、その起こり方には言語間での違いが少なくないことから実際には個々のゲルマン諸語への分裂後に起こったものと考えられる。この i-ウムラウトにより、u, ū, o, ō, a, ā はそれぞれ y, ŷ, æ, œ, æ, æ となり、のちに y, ŷ, æ, œ はしばしば非円唇化されて i, ī, e, ē となり、また AFB による前母音 æ は e に上げられた。さらに i-ウムラウトによって二重母音 ea, ēa, io, īo はウエストサクソン方言では ie (のちに i, y), īe (のちに ī, ŷ) となったが、他の方言では ea, ēa は e, ē となり、io, īo には i-ウムラウトは起こらず、のちにアングリア方言では滑化の環境にあった場合を除き eo, ēo となった。なお œ の ē への、そして ē の ī への上げは起こらなかった。

またウムラウトとしてはさらに後記の後舌ウムラウト、そして (IE *e* >) Gmc *e* の i への i-ウムラウトと Gmc *u* の o への a-ウムラウトがあり、後2者は従来ゲルマン祖語において起こったとされてきたが、Cercignani (1980) が主張するように、これらもまたゴート語以外のゲルマン諸語の段階で起こったと考えられる。そして同様のことは (IE *eu* >) Gmc *eu* の iu への i-ウムラウトについても言えるであろう。

次に u, ū, o, ō, æ, a, ā, ea, ēa, io, īo の i-ウムラウトの主なケースを順に挙げることにする。

・WGmc *u* を引き継ぐ *u* の i-ウムラウト : *cyre* 'choice' (OS, OHG *kuri*) ; *cyning*, *cining* 'king' (OS, OHG *kuning*)。

・ウエストサクソン方言以外の方言で Gmc *e* の i-ウムラウトによる i が w と rC の間にあった場合にこの i が同じ舌位の後母音に後退した結果音 *u* の i-ウムラウト : Gmc **wersiz* (Go *wairs*) > **wirsi* (OS, OHG *wirs*) > **wursi* > *wyrs* 'worse'。

・WGmc *ū* を引き継ぐ *ū* の i-ウムラウト : *rȳman* 'to make room, to clear out' ; *sȳfre* 'sober, chaste, clean' (OS *sūbri*, OHG *sūbiri*)。

・ WGmc u + n + 無声摩擦音 s, þ という結合において u が後続の n の消失に伴う代償的長音化を受けた結果音 ū の i-ウムラウト : WGmc *unsti > ŷst ‘storm’ (OS ūst, OHG unst) ; WGmc *kunþjan > cýþan ‘to make known’ (OS kūdian, OHG kunden, Go kunþjan)。

・ 借入語に見られる o の œ (>e) への i-ウムラウト : L oleum > *oli > œle, ele ‘oil’ (OHG oli)。

・ u の a-ウムラウトに由来する o の œ (>e) への i-ウムラウト : *dohtri > dœhter, dehter (dohtor ‘daughter’ の与格単数) ; *worpin > Nbr āwœrpen ‘thrown’。

このように o の i-ウムラウトは借入語、そして本来あったはずの u の代りに u の早期の a-ウムラウトによる o がのちに類推により導入された本来語、そして a-ウムラウトを引き起こした接辞母音のがのちに i-ウムラウトを引き起こす接辞母音 i に取って代られた場合に限定される。

dohtor (OS dohtar, dohter, OHG tohter, Gk thugátēr, Skt duhitá, Lith duktė) は Gmc *duhtēr に由来し、本来その与格単数は Gmc *duhtri であったはずであるが、主格単数のように u の a-ウムラウトによる o を有する形からの影響によって *duhtri は *dohtri に取って代られた。もし本来の形であったはずの *duhtri がそのまま引き継がれていたならばそれは **dyhter となっていたはずである。

また強変化動詞 3 類 *werpan ‘throw’ の過去分詞の本来の形を示しているのは u の早期の a-ウムラウトのみを反映する WGmc *wurpan > WS āworpen (OS worpan, OHG giworfan) であり、Nbr āwœrpen は a-ウムラウトを引き起こした接辞 *an- > *æn- (>-en-) がアプラウトを反映するもう 1 つの接辞 *in- (>-en-) にのちを取って代られて *worpin となったため、o の i-ウムラウトを有するようになったのである。もし本来の形として接辞 *in- を有する *wurpin が u の早期の a-ウムラウトに先立って形成され、そしてそれがそのまま引き継がれていたならば **wyrpen となっていたはずである。

・ WGmc ō を引き継ぐ ö の œ (>ē) への i-ウムラウト : WS fēdan, Merc fœdan, Nbr fœda ‘to feed’ (OS fōdian, Go fōdjan) ; WS grēne, Nbr grœne ‘green’ (OS grōni, OHG gruoni)。

・ AFB による æ の i-ウムラウト : WGmc *stadi > (AFB) *stædi > stede ‘place’ (OS stedi, Go staps) ; erian ‘plow’ (Go arjan) ; bedd ‘bed’ (OS bed, beddi, Go badi)。

・ アングリヤ方言においては IC、ノーサンブリア方言においては rC の前で AFB による æ が後退を受けた結果音 a の i-ウムラウト : ald ‘old’ の比較級 *aldira > Merc ældra ‘older’ (OHG altiro) ; Nbr wærma ‘to warm’ (Go warmjan) ; Nbr ā-, gewæltan ‘to roll(it)’ (Go waltjan) ; Gmc *falljanan > (AFB) *fælljan > (後退) *falljan > (i-ウムラウト) Merc gefællan ‘to make fall’ (OS bifellian)。

・ 子音(群) + u + 子音(群) + i, j の前で AFB による æ が次音節の後母音 u の影響で a への復元を受け、この a が次音節の u とともに最終音節の i, j による i-ウムラウトを受けた。なお、次音節の u の i-ウムラウトの結果音 y はほとんどの場合すでに e に弱化していた : *fastunnj- > (AFB) *fæstunnj- > (復元) *fastunnj- > (i-ウムラウト) *fæstynn > fæsten ‘fastening’ (OS fastunnia) ; *gaduling > (AFB) *gæduling > (復元) *gaduling > (i-ウムラウト) *gædyling > gædeling ‘companion’ (OS gaduling) ; *tō / at gaduri ‘together’ (OFris tōgadere) > (AFB) *tō / æt gæduri > (復元) *tō / æt gaduri > (i-ウムラウト) *tō / æt gædyri > tōgædere, ætgædere (OE gadorwist ‘companionship’, OFris gadur ‘together’) ; *anudi > *ānudi > *ænydi > ænid ‘duck’ (OHG anut)。これは二重ウムラウト (double umlaut) と呼ばれるものであり、‘fastening’ については fæsten のほか第 2 の前舌化が加わったマーシア方言形 festen も見られる。

なお、この二重ウムラウトにおいては次音節における u もまた i-ウムラウトによっていったんは y となってい

たことは、同じく二重ウムラウトに該当する例で*i*-ウムラウトの入力として第1音節に鼻音の前で鼻音化された \bar{a} を有した (**anudi*>)**ānudi*>**ænydi*>*ænid* ‘duck’ (OHG *anut*)、そして *i*-ウムラウトの入力として第1音節に \bar{a} を有した (**aimurjōn*->)**āmurjæ*>*æmyrge* ‘embers, live coals’ (OHG *eimuria*、ON *eimirja*) によって明確に裏付けられる。

・本来ならば AFB による \ae が *e* への *i*-ウムラウトの入力となるべき位置で、この \ae が復元による *a* に類推的に置きかえられ、それが *i*-ウムラウトを受けた : **farip*>*fær*(*e*)*p* ‘(s)he goes’ (OHG *ferit*)。すなわちこれは本来 ***fer*(*e*)*p* となるべきところが、次音節の後母音の影響で *a* への復元を受けた不定詞 *faran* や複数形 *farap* などへの類推により、本来の AFB による \ae に代り導入された *a* の *i*-ウムラウト。

・WGmc *a* は鼻音の前では AFB に先立ってすでに \bar{a} に鼻音化されていたため、AFB による \ae へ前舌化は受けなかったが、*i*-ウムラウトによる前舌化を受けた直接の結果は \ae であった。そしてこれはさらに鼻音の影響で *e* に上げられた : **kānnjān*>**kænnjan*>**cænnan*>*cennan* ‘to beget’ ; **kānnidæ*>**kænnidæ*>*cændæ*>*cende* (*cennan* の直説法過去3人称単数) ; **āndi*>**ændi*>*ende* ‘end’ (OS *endi*、Go *andei*) ; **framip*>**frānip*>*fræmith*>*fremeþ* (Gmc **framjanan*> WGmc **framjan*> *frāmmjān*> **fræmman*> *fremman* ‘to advance, to further, to promote’ (OS *fremmian*、OHG *fremmen*、ON *fremja*) の直説法現在3人称単数) ; *graemman*、*gremman* ‘to irritate’ (OHG *gremmen*、ON *gremja*、Go *gramjan*) ; 前記の二重ウムラウトの実例でもある **ānudi*>**ænydi*>*ænid*>*ened* ‘duck’ (OHG *anut*)。

\bar{a} の *i*-ウムラウトが最初は *e* ではなく \ae であったことはさらに Ringe & Taylor (2014: 229) が指摘する次の2点からも裏付けられる。すなわちテムズ川北部のかなり狭い地域ではあるが、 \ae の *e* への上げが起こらなかった地域があったことは中英語からの証拠から分かるほか、 \ae を *e* への上げに先立って起こった音位転換 (metathesis) によって保っていた次の2つの動詞からも確認できる。それは *bærnan* ‘to burn’ (他動詞)、*ærnan* ‘to make (a horse) gallop’ であり、*bærnan* は **brānnjān* (Go *gabranjan*) > (*i*-ウムラウト) **brænnjan*> (音位転換) *bærnan*、そして *ærnan* は **rānnjān* (Go *urrannjan* ‘to cause (the sun) to rise’) > (*i*-ウムラウト) **rænnjan*> (音位転換) *ærnan* という音過程の結果である。

・WGmc *ai* に由来する \bar{a} の *i*-ウムラウト : **hailjan*> **hāljan*> *hælan* ‘to heal’ (OS *hēlian*、OHG *heilen*、Go *hāiljan*)。これは形容詞 *hāl* ‘healthy, sound’ (OS *hēl*、OHG *heil*、Go *háils*) の動詞形である ; **hwaiti*>**hwāti*>*hwæte* ‘wheat’ (OHG *weigi*、Go *huáiteis*) ; **stainin*> **stānin*> *stænen* ‘(made) of stone’ (OHG *steinin*、Go *stāineins*)。

・WGmc \bar{a} の鼻音化による \bar{a} 、そして Gmc *a* + 鼻音 + 無声摩擦音という結合において *a* が鼻音化と後続の鼻音の消失に伴う代償的長音化を受けた結果音 \bar{a} の反映の *i*-ウムラウト。*i*-ウムラウトの段階では、Wright & Wright (1925³: 43-44, 79)、Brunner (1965³: 53, 76) のようにこのいずれもが WGmc \bar{o} に由来する \bar{o} と完全に併合した結果音 \bar{o} の *i*-ウムラウトとする見方と、Campbell (1959: 77-78) のように \bar{a} であった、あるいは Hogg (1992: 126-127)、Ringe & Taylor (2014: 230) のように \bar{a} は円唇化の段階に進んではいたものの、まだ完全には \bar{o} とはなっていないとする見方がある。後者の根拠として Campbell (1959: 50)、Hogg (1992: 60)、Ringe & Taylor (2014: 282) は WGmc \bar{a} が鼻音化と短化を受けた場合、*samcwic*、*samcucu* ‘half-alive’ (OS *sāmquik*、OHG *sāmiquek*) が示すように、WGmc *a* の反映と同一になっている事実を挙げている。さらに Campbell (1959: 50) は鼻音化された WGmc \bar{a} が \bar{o} となった後で短化と *i*-ウムラウトを受けていたのであれば、それは (WGmc *a*>) \bar{a} の *i*-ウムラウトの結果と同一の実際の \ae ではなく *o* の *i*-ウムラウトと同一の \ae となっていたはずであるとしている。こ

のことは Campbell (1959: 50)、Hogg (1992: 127)、Ringe & Taylor (2014: 282) が挙げている *bræmbel* ‘bramble’ とその複数形 *bræmblas* からも裏付けられるのであり、これは *brōm* ‘broom’ (OHG *brāma* ‘thornbush’) の指小形 **brāmil* に由来する。

そして Campbell、Hogg、Ringe & Taylor は Gmc a + 鼻音 + 無声摩擦音という結合において a が鼻音化と後続の鼻音の消失に伴う代償的長音化を受けた結果音 *ā* もまた同様に i-ウムラウトの段階では WGmc *ō* に由来する *ō* と完全に併合していなかったのではないかとしていることから、本稿でも WGmc *ō* に由来する *ō* の i-ウムラウトとは区別されるものとして上記の WGmc *ā* からのケースとともにその i-ウムラウトの例を以下に示す：(WGmc **kwāni* >) **kwāni* > *cwōen*, *cwēn* ‘woman, wife’ (OS *quān*) ; (WGmc **kwāmī* >) **kwāmī* > *gecwōeme*, *gecwēme* ‘pleasant’ (OHG *biquāmi* ‘acceptable’) ; (WGmc **wānjan* >) **wānjān* > *wōena*, *wēnan* ‘to expect, to hope’ (OS *wānian*) ; (Gmc **fanhið* >) **fāhiþ* > **fōehþ* (マーシア方言には円唇音 *œ* を維持した **fōehið* > (母音縮約) *onfōeð* ‘(s)he receives’ が見られる) > *fēhþ* ‘(s)he grasps’ (OS, OHG *fāhit*, Go *gafāhiþ*)。i-ウムラウトの環境にはなく、かつ接辞の無い命令法単数は Gmc **anh* の反映をそのまま反映する (**fanh* >) *fōh* である ; (Gmc **anhtjanan* >) **āhtjān* > *ōhtan* > *ehtan* ‘to persecute’ (OS *āhtian*, OHG *āhten*)。i-ウムラウトの環境にはなかった元の名詞形は Gmc **anh* の反映をそのまま反映する *ōht* ‘persecution’ (OHG *āhta*) である ; (WGmc **ansti* >) **āsti* > **ōest* > *ēst* ‘favor’ (OS, OHG *anst*, Go *ansts*) ; (WGmc **[gānsi]* >) **[gāsi]* > **gōes* > *gēs* ‘geese’ (WGmc **[gāns]* > **[gās]* > *gōs* ‘goose’ (OHG *gans*) の主格対格複数) ; (WGmc **nanþjan* >) **nāþjān* > **nōeþan* > *nēþan* ‘to be bold’ (OS *nāðian*, OHG *nenden*, Go *anananþjan*) ; (WGmc **samfti* >) **sāfti* > **sōefte* > *sēfte* ‘soft, gentle’ (OHG *semfti* ‘easy’)。 *sōft* ‘soft, gentle’ (OS *sāftor* ‘more easily’, OHG *samft* ‘easy’) のように i-ウムラウトを引き起こす接辞 **-i* を有していなかったことによる WGmc *ō* の反映と同一の *ō* を示す形もある。

・ウェストサクソン方言とケント方言において AFB による *æ* の IC の前での割れによる *ea* の WS *ie* (>*i*, *y*)、Kt *e* への i-ウムラウト : *eald* ‘old’ の比較級 **ealdira* > *ieldra*, *eldra* ‘older’ (Angl *ældra*, OHG *altiro*) ; **wealtjan* ‘to roll(it)’, **wealtip* ‘(s)he rolls(it)’ > WS **wieltan*, WS **wieltip*, Kt **weltip* > *wyltan*, *wylt*, *welt* (Nbr *ā-*, *gewæltan*, Go *waltjan*, OHG *welzit*) ; **healdip* > WS **hieldip*, Kt **heldip* > *hielt*, *helt* ‘(s)he holds’ (Go *haldip*) ; **fealljan* > WS **fiellan* > *fyllan* ‘to make fall’ (Merc *gefællan*, OS *bifellian*)。

・ノーサンブリア方言を除く全方言で AFB による *æ* が *rC* の前できわめて規則的に割れを受けた結果音 *ea* の WS *ie* (>*i*, *y*)、nWS *e* への i-ウムラウト : *wearm* ‘warm’ の動詞形 **wearmjān* > WS *wierman*, Merc *werman* ‘to warm’ (Nbr *wærma*, OS *wermian*, Go *warmjan*) ; **earfi* > WS *ierfe*, Kt, Merc, Nbr *erfe* ‘inheritance’ (OS *erfi*, Go *arbi*)。

・全方言で AFB による *æ* が *h* の前できわめて規則的に割れを受けた結果音 *ea* の WS *ie* (>*i*, *y*)、nWS *e* への i-ウムラウト : **sleahip* > WS *sliehþ*, Kt *slehð*, Merc *slēð* ‘(s)he strikes’ (Go *slahip*)。なお、Merc *slēð* は **sleahip* > (i-ウムラウト) **slehip* > (母音縮約) *slēð* という音過程の結果である ; **hleahhjan* > WS *hliehhan*, nWS *hlehhan* ‘to laugh’ (Go *hlahjan*)。 *hleahtor* ‘laughter’ (OHG *lahtar*) には i-ウムラウトの入力となった元の母音 *ea* が確認できる。

なお、割れによる *ea* の i-ウムラウトの結果である WS *ie* の音価は綴り字どおりの [ie] ではなく、Colman (1985: 9)、Hogg (1992: 132)、Lass (1994: 69) に従い、[iy] のように解釈する方がより正確であろう。そして Colman (1985: 9)、Lass (1994: 69) はこの i-ウムラウトによる *ie* へのプロセスとしては AFB による [æ] が割れにより [æu] となり (i-ウムラウトの環境にはなかった場合にはのちに二重母音高さ調和により [æa] となった)、次に第 1 要

素 [æ] が i-ウムラウトにより [e]、続いて第2要素の [u] が i-ウムラウトにより [y]、そしてさらに [y] が先行の第1要素 [e] の上げを起こした結果が ie [iy] であったとしている。すなわち ea>ie の i-ウムラウトのプロセスは [æa] > [iy] ではなく [æu] > [eu] > [ey] > [iy] であったということになる。

次の硬口蓋二重母音化による ea については割れとは成立過程も異なるため、硬口蓋二重母音化の直後でのその音価も異なっていたと思われるが、最終的には割れによる ea と併合した。

・ AFB による æ のウェストサクソン方言での硬口蓋二重母音化による ea の ie (>i, y) への i-ウムラウト : *cētil > *cietel > cýtel 'kettle' (OHG kezzil, Go katilē) ; *gēasti > gíest 'guest' (PN -gastiR) ; *sceappjan > scieppan 'to make, to create' (Go gaskapjan)。なお scieppan の過去分詞 sceaopen (Go skapans) には i-ウムラウトの入力となった元の ea が確認できる ; *sceaþþjan > *scieþþan > scýððan 'to harm' (Go skapjan) ; WGmc *skarjan > (AFB) *skærjan > *scærjan > *sceaerjan > *scierian > scýrian 'to distribute, to allot' (OS skerian)。しかし æ の硬口蓋二重母音化のない他の方言でのこの5者の対応形は AFB による æ の e への i-ウムラウトのみを反映する cētel, gēst, *sceppan (>sceppend 'creator'), scēþþan, biscergan である。

・ WGmc au はいったん OE ēa となったが (OE lēas, OS, OHG lōs, Go láus 'free (from)' ; OE ēage, OS ōga, OHG ouga, Go áugō 'eye'), それにさらに i-ウムラウトを受けると WS ie (>i, y), nWS ē となった : lēas の動詞形 *lēasjan > WS liesan, Kt lēsan, Merc ālēsan, Nbr ālēsa 'to release, to set free' (OS lōsian, OHG lösen, Go láusjan) ; *dēapjan > WS *diepan > dýpan, Nbr dēpa 'to dip, to baptize' (OS dōpian, OHG toufen, Go dāupjan) ; *ēaþi > WS ieþe, Nbr ēde 'easy' (OS ōdi, OHG ōdi) ; *hēarjan > WS hīeran > hýran, Kt, Merc hēran, Nbr hēra 'to hear' (OS hōrian, OHG hören)。

・ WGmc ā > WS æ の h の前での割れによる ēa の ie (>i, y) への i-ウムラウト : nēah 'near' の最上級 *nēahist > niehst (OHG nāhist)。

・ WGmc ā > WS æ の硬口蓋二重母音化による ēa の WS ie (>i, y) への i-ウムラウト : L cāseus > *cāsi > *cēasi > *cīese > cýse 'cheese' (Angl, Kt cēse, OS, OHG kāsī)。

WGmc au に由来する ēa と割れによる ēa についても Colman (1985: 9)、Lass (1994: 69) はどちらも当初は [æu] だったのであり、これが i-ウムラウトの環境にはなかった場合には二重母音高さ調和により [æa] となったが、i-ウムラウトの環境下では第1要素の [æ] が i-ウムラウトにより [ē]、続いて第2要素の [u] が i-ウムラウトにより [y] となり、さらに [y] が第1要素 [ē] の上げを起こした結果 ie [iy] となった、すなわち短母音 ea の場合と同じく ēa>ie の i-ウムラウトのプロセスは [æa] > [iy] ではなく [æu] > [ēu] > [ēy] > [iy] であったとしている。硬口蓋二重母音化による ēa は WGmc au に由来する ēa と割れによる ēa のいずれとも成立過程が異なるため、硬口蓋二重母音化の直後での音価も異なっていたと思われるが、前者は最終的には後者と併合した。

・ Gmc e の早期の i-ウムラウトによる i の割れに由来する io [iu] の WS ie [iy] (>i, y) への i-ウムラウト : *sihþ > *siohþ > siehþ '(s)he sees', (Kt -siohð, OS, OHG (gi)sihit, Go saihþ) ; *hirdi > *hiordi > hierde 'herdsman' (Nbr hiorde, Merc heorde, OS hirdi, Go háirdeis) ; *girnjan > *giornjan > giernan 'to be eager for, to desire' (Nbr giorna, OS girnian, Go gairnjan) ; Gmc *wersiz > *wirsi (>*wursi > Angl wyr) > *wiorsi > wiers 'worse' (OS, OHG wirs, Go wairs)。

・ Gmc e の早期の i への i-ウムラウトに匹敵し、またそれと同時期のものと考えられる Gmc eu の i-ウムラウトによる iu に由来する io [iu] の WS ie [iy] (>i, y) への i-ウムラウト : IE *bheudh- > Gmc *beuð- > *biudip > *biūdiþ > *bīodiþ > bebiet(t) '(s)he commands' (Kt bebiot, OS bibiudid, OHG biutit, Go anabiudip, Gk

peúthō) ; *hiuri > *hīori (> Angl *hīore > hēore) > *hiere > hýre ‘gentle, pleasant’ (OHG hiuri ‘sincere’) ; *unhiuri > *unhīori (> Angl unhiore > unhēore) > unhiere > unhýre ‘horrible, deadly’ (OS unhiuri ‘horrible’) ; WGmc *leuht > léoht ‘light’ [名詞] (OS, OHG liht ‘light’, Gk leukós ‘white’) の動詞形 *liuhtjan > *liohtjan (> (滑化) Merc lihtan, Nbr lihta) > WS liehtan ‘to shine, to illuminate’ (OS liuhtian, OHG liuhten)。

また早期のアングリヤ方言には古い綴り字 iu (音価はのちの io と同じ) を有する *geþiudde*, *þiustra*, *fiusum* のような例が見られる : (*þiudidæ >) Merc *geþiudde* は (*þiudjan > *geþiudjan >) *geþiudan ‘to join’ (WS *geþiedan*) の過去単数である。なお、ウェストサクソン方言には予想に反し *eo* を有する *geþeodan* も見られるが、これは Ringe & Taylor (2014: 247) が述べているように、マーシア方言の影響が考えられる ; Nbr *þiustra* ‘darkness’ (対格複数) は WS *þiestre*, Merc *þeostre* ‘dark, gloomy’ の前段階の *þiustrī (OS *thiustri*) から派生した *ō*-語幹名詞であり、主格単数の WS *þiestru*, Nbr *þiostru* にもその元の形容詞が接辞に *i* を有していたことに由来する *iu* の反映が保たれている ; Merc *fiusum* は *i*-語幹名詞 ‘fleece’ の与格複数であり (主格単数としては *fiosi > WS *flies* が見られる)、これは *i*-語幹名詞本来の接辞 *im が *eu* > *iu* > *iu* への変化後に *a*-語幹名詞の接辞 -um に取って代られたことを示している。

・ *i* が *h* の前で割れを受けた結果音 *io* の WS *ie* (> *i*, *ȳ*) への *i*-ウムラウト : *wrihiþ > *wriohiþ (> (滑化) Merc *oferwrið*) > WS *wriehþ* ‘(s)he covers’ (OHG *intrihit* ‘(s)he uncovers’) ; IE *H₁leng^wh- > Gmc *lenh^wtjanan > *linhtjanan > *lihtjan > *liohtjan > *liehtan > lȳhtan ‘to alleviate’ (OHG *lihten* ‘to make easier’, Gk *elakhús* ‘small’, Lith *leŋgvas* ‘easy, light’)。これは形容詞 IE *H₁leng^whtos > Gmc *lenh^wtaz > *linhtaz > *liht > WS *lioht*, *leoht* ‘light in weight’ (OHG *liht*, Go *leihts*) の動詞形である。

8. 後舌ウムラウト (back mutation)

後舌ウムラウトは主に前母音 *i*, *e*, *æ* が次音節の後母音の影響でそれぞれ *io* (> *eo*), *eo*, *ea* となった現象であり、さらに元の *i*, *e* がそこに *w* が先行していた場合にそれぞれ *u*, *o* となったケースもあり、後者を Campbell (1959: 86)、Ringe & Taylor (2014: 320) は 連音後舌ウムラウト (combinative back mutation) と呼んでいる。後舌ウムラウトの起こり方は散発的であり、またすべての方言で規則的に起こったわけではなく、さらに後続子音の種類が後舌ウムラウトの有無を左右した。Lass (1994: 51) が述べているように、後舌ウムラウトは後母音の前位置での割れと言えるかもしれない。

・ *i* > *io* の後舌ウムラウトはウェストサクソン方言では流音、唇音の前で、アングリヤ方言では軟口蓋子音を除くすべての子音の前で、そしてケント方言ではすべての子音の前で見られる : WS *hiora*, *heora* ‘their’, Merc *heora*, Nbr, Kt *hiora* (OFris *hira*) ; WS *tiolung*, Merc *teolung* ‘effort’, Merc *tioludun* ‘they have persisted’ (OHG *zilōn* ‘to exert oneself’, Go *gatilōn* ‘to attain’) ; WS *siolfor* ‘silver’, *siolufres* (属格単数), Merc *seolfur*, *seolfres* (OS *silubar*, *silubres*) ; WS *limu*, *liomu*, *leomu*, Merc *liomu* (*lim* ‘limb’ (ON *limr*) の主格対格複数) ; WS, Merc *liofað*, *leofað*, Nbr *liofað* ‘(s)he lives’ (OS *libod*) ; WS *hinan*, Merc *hionan*, Nbr *hiona* ‘from here’ (OS, OHG *hinan*) ; WS *andwlita*, Merc *ondwleota*, Nbr *ondwlita* ‘face’ (ON *andlit*) ; Gmc *e* が単一の *m* の前での上げを受けた結果音 *i* の後舌ウムラウト : Kt, Merc *nioman*, Nbr *nioma* ‘to take’ (OS *niman*, OHG *neman*, ON *nema*)。

・ *i* > *u* の連音後舌ウムラウトを示す例 (この場合、後続子音による制約はない) : WS, Merc, Nbr *wudu*, Merc *widu* ‘forest, tree, wood’ (OHG *witu* ‘wood’), Kt (**wioda* >) *weada* ‘of wood’ ; WS *wuduwe*, *widuwe*, Merc *widwe*, Nbr *widua* ‘widow’ (OS *widowa*, Go *widuwō*) ; WS *wucu*, Nbr *wicu* ‘week’ (Go *wikō* ‘shift, assigned

turn') ; WS witan, Merc weotan, Nbr wuta 'to know' (OS, Go witan)。

・e>eo の後舌ウムラウトはウェストサクソン方言では後続子音が流音、唇音、そしてさらに次音節の母音が u (>o) であった場合に限定されていたのに対し、他の方言では制約ははるかに少なく、後続子音が軟口蓋子音であった場合を除くというアングリア方言での制約のみであった : WS eofor, Merc eobor, eofur 'wild bear' (OHG ebur) ; WS heorot, Merc heorut, Nbr heart 'hart' (OHG hiruꝥ, ON hjǫrtr) ; WS beran, Merc beoran, Nbr beara 'to carry' (OS, OHG beran) ; WS wefan, Merc weofan 'to weave' (OHG weban) ; WS wela, Merc weola, Nbr weala 'property, wealth', Kt weolan 'riches' (OS welo) ; WS etan, Merc eotan, Nbr eotta, eatta 'to eat' (OS etan) ; WS cweþan, Merc cweoðan, Nbr cweða 'to say' (OS quedan) ; WS fetor, Merc fetor, feotur 'fetter' (ON fjǫturr) ; WS ġebedu, Merc ġebeodu, Nbr ġebeodo 'prayers' (OHG gibet 'prayer') ; WS ġiefu, Merc ġeofu 'gift' (OFris jeve, ON ġiǫf)。なお、この WS ġiefu の場合、e は後舌ウムラウトに先立って硬口蓋二重母音化により、後舌ウムラウトへの入力とはなり得ないに二重母音 ie となっていたため、唇音の前であっても eo への後舌ウムラウトは起こり得なかったものと考えられる。また e>eo の後舌ウムラウトはさらに AFB による æ の i-ウムラウトと鼻音化された a の i-ウムラウトに由来する e にも起こった : L asellus>WGmc *asil> (AFB) *æsil> (i-ウムラウト) *esil> (接尾辞の変異により) *esul> esol> eosol 'donkey' (OS, OHG esil, Go asilus) ; fremu, freomo 'benefit'。後者は弱変化動詞1類で i-ウムラウトを反映する (WGmc *framman>) fremman 'to further' (OS fremman, ON fremja) と同根であり、fremu の語根母音 e はそこから導入されたものである。

・e>o の連音後舌ウムラウトを含む例 : WS weorod, Merc weorud, Nbr worod 'company', compwearod '(Roman) cohort' (OS werod) ; WS wesan, Merc *weosan 'to remain, to be' (>Merc ætweosendne 'at hand, looming'), Nbr wosa (OS wesan)。

・æ>ea の後舌ウムラウトはマーシア方言においてのみ起こった。すなわち後舌ウムラウトの入力となる æ は AFB による æ が次音節の後母音の影響による復元 (restoration) を経たことによる a が第2の前舌化により再び æ に前舌化されたマーシア方言に限定される。それは例えば WS fatu : Merc featu 'containers' という対応に現れており、WS fatu は WGmc *fatu が AFB により*fætu、そして復元により fatu となった結果であるのに対し、Merc featu は復元による*fatu がさらに第2の前舌化により*fætu、そしてそれが後舌ウムラウトを受けた結果である。ただし æ の後舌ウムラウトは軟口蓋子音の前では見られない (WS dagas : Merc dægās 'days' ; WS wracu : Merc wræcu 'vengeance')。なお、軟口蓋子音の前では後舌ウムラウトが見られないことについて Campbell (1959: 106) はマーシア方言では後舌ウムラウトによる結果がのちに滑化 (smoothing) により消去されたためとしている。

æ, e, i の後舌ウムラウトに起因する母音は ea, eo, io のように二重母音的に表記されるが、元の æ, e, i から音量が2倍に、すなわち長母音と同じ音量になったわけではなく、音量としては短音のままであったと考えられる。この点について Lass (1994: 46) は特にその1例としての中性 a-語幹名詞 ġebed 'prayer' の主格対格複数 Merc ġebeodu 'prayers' に注目している。すなわち同じ中性 a-語幹名詞でも重語根形の主格と対格では bān 'bone(s)', word 'word(s)', dēor 'animal(s)' のように複数形の接辞母音 -u は消失し、単複同形となっているのに対し、Merc ġebeodu ではその対応する明らかに軽語根形の WS ġebedu と同じく-u は維持された。このことは Merc ġebeodu、そしてもちろん Nbr ġebeodo もまた軽語根のままであった、すなわち後舌ウムラウトによる eo は長音ではなかったことを裏付けるものである。同じことは末尾の -u を維持する上記の同じく中性 a-語幹名詞の主格対格複数 liomu, featu の io, ea, ð-語幹名詞 ġeofu, freomo の eo についても言えるのであり、さらに ð-語幹名詞と同じく末尾の -u を維持する ġiefu は硬口蓋二重母音化に由来する ie もまた音量としては io, eo, ea と同じく

短音のままであったことを裏付けるものである。そして同じことは音価が他の音変化に由来するすべての io、eo、ea、ie についても言える。

9. 滑化 (smoothing)

滑化については4.の割れ、そして7.のi-ウムラウトの項目でもすでに間接的にそのいくつかの実例を挙げたが、ここに古英語における音変化の1項目として改めて取り上げることにする。

アングリア方言では滑化により二重母音 ea、ēa、eo、ēo、io、īo が、そこに軟口蓋子音K (c、g、h を表す) がじかに後続していた場合と r + K、l + K が後続していた場合、æ、ǣ、e、ē、i、ī に単母音化された。さらにこれらのうち æ はのちに無条件に ē に、そして æ は r + K の前で e に上げられた。

・ eah > æh : Merc *gesæh*, Nbr *sæh* '(s)he saw' (WS *seah*) ; Nbr *æhto* 'eight' (WS *eahta*)。

・ earK > ærK > erK : Merc *mærc*, *merc* 'boundary, border' (WS *mearc*) ; Merc *mærh*, *merg* 'marrow' (WS *mearg*) ; Merc *wearg*, *wærg* 'criminal' (WS *wearg*) ; Merc *færh* 'piglet' (WS *fearh*)。

・ ēaK > æK > ēK : Merc *bācn*, *bēc(e)n*, Nbr *bēcon* 'sign' (WS *bēacn*, OS *bōkan*, OHG *bouhhan*) ; Merc *æge*, *ēge*, Nbr *ēgo* 'eye' (WS *ēage*) ; Merc *hæh*, *hēh*, Nbr *hēh* 'high' (WS *hēah*, Go *háuhs*)。

なお、このように滑化による æ がのちにさらに ē に上げられたのに対し、(Gmc **ahtiz* > **ahti*) *æht* 'property' (Go *áihts*) における ā の i-ウムラウトに由来する æ もまたこの ē への上げと同じ環境、すなわち h の前にあったにもかかわらず、なぜか ē に上げられることはなかった。これは ē への上げの段階では i-ウムラウトに由来する æ と滑化による æ とは完全には同一音とはなっていなかったからかもしれない。この点について Hogg (1992 : 149) は i-ウムラウトに由来する æ は [æ]、しかし滑化による æ はそれよりも舌位がわずかに高めのほぼ [ē] のようになっていたからではないかとしている。

・ eoh > eh : Merc, Nbr *geseh* 'see!' (WS *seoh*) ; Merc *fehntan*, Nbr *fehnta* 'to fight' (WS *feohtan*)。

・ eorK > erK : Merc, Nbr *werc* 'work' (WS *weorc*) ; Merc *berg* 'hill, mountain' (WS *beorg*) ; Merc, Nbr *berht* 'bright' (WS *beorht*)。

・ eolh > elh : WGmc **felhan* 'to push in' の仮定法現在 1 人称単数 **felhæ* > (割れ) **feolhæ* (> WS *fēole*) > Merc **felhæ* > *fēle*。しかし lh に後母音が後続していた不定詞はその対応形の (**feolhan*) WS *fēolan* 'to push in' と同じく滑化が見られない Merc *ætfeolan* 'to cling' となっている。

・ ēoK > ēK : Nbr *sēc* 'sick' (WS *sēoc*, OS *siok*) ; Merc *flēgan* 'to fly' (WS *flēogan*, OHG *fliogan*) ; Merc, Nbr *lēht* 'light' [名詞] (WS *lēoht*) ; Merc *gētēh* 'draw together!, bind!' (WS *tēoh*, OS *tioh*) ; Angl **nēoh* > Merc, Nbr *nēh* 'near'。

・ ioh > ih : **siohiþ* (> Kt *-siohð*) > Angl **sihþ* > Nbr *gesihþ* '(s)he sees'。

・ ioh > ih : **liht* > (割れ) **lioht* (> WS *lioht* > *lēoht*) > Merc, Nbr *liht* 'light in weight' ; **liuhtjan* > **liohtjan* (> WS *liehtan*) > Merc *lihtan*, Nbr *lihta* 'to shine, to illuminate'。

10. 母音縮約 (contraction of vowels)、代償的長音化 (compensatory lengthening)

母音縮約と代償的長音化については本稿でここまで他の項目のもとで必要に応じ間接的に挙げてきたものを含む有声音間の h の消失に伴う一部のケースの例示にとどめておくが、これらの例から方言間の滑化の有無という相違が h の消失とそれに続く母音縮約と代償的長音化による結果の方言間でのさらなる相違を生じていることもま

た改めて確認できるであろう。

・母音縮約の例 : *sleahīþ > nWS *slehiþ > Merc slēð '(s)he strikes' (Kt slehð, WS sliehþ) ; Angl *sihiþ > Merc gesiþ '(s)he sees' (Kt -siohð, WS siehþ, Nbr gesihþ) ; 'to strike, to kill' の仮定法現在単数 Gmc *slahai- (OHG slahe) > (AFB) *slæhæ > (割れ) *sleahæ > (滑化) Angl *slæhæ > Merc slæ. なお, Hogg (1992: 177-178) のように h の消失後の代償的長音化という中間段階 (*slē-ið, *si-iþ, *slæ-æ) を経ているとする見方もある ; Angl *nēhist > nēst 'nearest' ; *wrihan > (割れ) *wriohan > WS wrion > wrēon 'to cover' と *wriohan > (滑化) Merc *wrihan > *wrian > oferwrēan (OHG intrihan 'to uncover') ; *wriohiþ (> WS wriehþ) > (滑化) *wrihiþ > Merc oferwrið '(s)he covers' ; WGmc *fleuhan (OHG fliohan) > *flēohan > WS flēon 'to flee' ; 'to flee' の仮定法現在複数 *flēohæn > WS flēon と *flēohæn > (滑化) Angl *flēhæn > Merc flēn.

・代償的長音化の例 (ここまで必要に応じ間接的に取り上げてきたものにとどめておく) : WS *sćielhan > *sćielan (> scýlan) 'to squint' ; *filhiþ > Merc ætfileð '(s)he clings' ; *swirhjan- > WS *swiorhja > *swierhja > *swiera (> swýra) 'neck', これに対し *swirhjan- > Nbr *swirhja > swira. Ringe & Taylor (2014: 183) が指摘しているように, Nbr swira の単母音 i は滑化に起因するものではなく, そもそも割れが起こらなかったことによるものと考えられる ; *feolhan > WS fēolan 'to push in', Merc ætfeolan 'to cling'. そしてその仮定法現在 1 人称単数 *feolhæ > WS fēole, これに対し *feolhæ > (滑化) Merc *felhæ > Merc fēle. このマーシア方言形の ætfeolan と fēle はどちらも h の消失に伴う代償的長音化を示すものの, h に後続していた母音が前母音または後母音のいずれであったかということが, 割れの生起後のそれぞれの h の消失と滑化との順序関係を左右していたと考えられる (なお, h の消失と滑化との順序関係を左右する条件については Ringe & Taylor (2014: 305-307) が具体的かつ詳細な分析を試みている)。

・母音縮約と代償的長音化の両方を示す例 : (WGmc *sehan >) *seohan 'to see', 直説法現在 3 人称複数 *seohaþ, 仮定法現在 3 人称単数 *seohæ (OHG sehan, sehant, sehe) > WS sēon, sēoþ, sēo, これに対し *seohan, *seohaþ, *seohæ > (滑化) Angl *sehan, *sehaþ, *sehæ > Merc gesian ~ gesēan, gesiāð ~ gesēað, gesē ; 'to strike, to kill' の仮定法現在単数 *sleahæ > WS slēa, これに対し *sleahæ > (滑化) Angl *slæhæ > Merc slæ.

[参考文献]

- Brunner, K. 1965³. *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Cercignani, F. "Early 'umlaut' phenomena in the Germanic languages." *Language* 56, 126-136.
- Colman, F. 1985. "Old English *ie* : quid est?" *Lingua* 67, 1-23.
- Hogg, R. M. 1992. *A grammar of Old English*. Vol. I : *Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Kroonen, G. 2013. *Etymological dictionary of Proto-Germanic*. Leiden-Boston: Brill.
- Lass, R. 1994. *Old English: a historical linguistic companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Orel, V. 2003. *A handbook of Germanic etymology*. Leiden-Boston: Brill.
- Ringe, D. & A. Taylor. 2014. *The development of Old English: a linguistic history of English*. Vol. II. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.